

## 合格体験記（法科大学院）

私は、諸所の理由（特に経済的理由）から、未修者としての進学は考えておらず既習者コースしか受験しなかったため、以下、既習者コースの受験について述べさせていただきます。

まず、これは既習・未修関係ありませんが法科大学院を受験するためには適性試験を受験しそのスコアを提出しなければならなかったため、適性試験に向けた学修を進めました。法科大学院によって異なりますが、この適性試験のスコアは、法科大学院入試においてそれなりの比重を占めることが多かったため、受験していた旧司法試験の論文期ではありましたが、適性試験向けの予備校の簡単な講座を受講し、過去問を解くといった学習をしました。日弁連が行う適性試験のほうが先に行われるのでとりあえず、日弁連の過去問については問題集に載っているものをすべて二回とき、自分なりに解法や問題傾向、時間配分についての戦略といったものを考えました。その結果、日弁連本試験では期待していたより高いスコアが取れたため、その後行われる大学入試センターの適性試験は過去問を二年分解いてそのまま受験しました。個人的な感想ですが、日弁連のほうが時間的な余裕はありませんが問題自体は簡単なため、慣れや学習でスコアをあげやすいのではないかと思います。センターの方は、時間は結構余裕があるのですが問題が難しい、あるいはひねったものになっていて、解ける人は解けるが、解けない人は解けないという問題であるように感じました。具体的な適性試験対策ですがとりあえず昨年度の問題を一度といてみることをお勧めします。適性試験は得手不得手の差が非常によく出る試験であると思いますので、一度といてみて得意であれば特に対策をする必要もないかと思います。苦手であると感じた方は何らかの対策をとることが必要であると思います。最近は過去問もだいぶ出そろってきたため過去問をすべて解くだけでも、自分なりの解き方などがわかってくると思います。それでもまだ、不安であったり、スコアが上がらないという方は、予備校でもいくつか講座が開かれていますし、法職でも適性向けの講座が行われていますのでそれらの講座をとってみるといいと思います。

次に既習者試験に向けた対策について記述したいと思います。ここで言う既習者試験というのは、各法科大学院が行うものではなく、日弁連が行うものです。これは、明治大学で既習者コースを受験する際に必須となるほか、多くの法科大学院で任意提出書類となっていることから、既習者コースを目指す人の多くが受験するものだと思います。憲法、民法、刑法、商法、民事訴訟法、刑事訴訟法、行政法、について択一式で問うものですが、上記した旧司法試験の論文式試験の受験前に行われたことから、私はほとんどこの既習者試験に向けた学修というのはいりませんでした。憲法、民法、刑法については旧司法試験の択一式の勉強をしておけば十分だと思いますが、ほかの科目についてはやはりきちんとした対策が必要であったと思います。

それから、各法科大学院によって形式は異なりますが、一般にステートメントと呼ばれる志望理由書について記述したいと思います。この志望理由書ですが、よく言われるように社会人の方は社会での経験や実社会での問題意識など書くことがたくさんあると思うのですが、学生には正直あまり書くことがありません。しかし、このステートメントにもかなりの配点がある法科大学院もあり、適当に書かずしっかり対策を立てたうえで書くことが必要だと思います。志望理由を書く際には特に内容を具体的にするなどの工夫が必要となってくるのではないかと感じました。特に、地方に根差した町医者の弁護士になりたい、医療過誤訴訟を扱いたい、といった内容は非常に多くの方が書かれるので、相当具体的に書かないとなかなか合格点に至るのは難しいのではないかと思います。また、私自身そうでしたが、複数の大学院を受験する場合は、一番長く書かなければならないステートメントを最初に書き、ほかの大学院のものはそれをうまく縮めるなどすると非常に楽です。またよく言われることですが、一度書いたら必ず誰かに見てもらう必要があるかとも思います。自分では気付かなかった間違いやおかしな点などが必ず見つかるものです。

最後に各法科大学院入試に向けた対策について記述したいと思います。各法科大学院によって当然内容は異なりますし、面接を課される法科大学院などもありましたが、やはり一番重要なのは法律科目試験であると思います。私は旧司法試験に向けて、択一式・論文式ともに学習を進めていたので、特に法科大学院に向けて新しい学習をするということはありませんでした。というより、正直旧司法試験の論文試験に向けた勉強で燃えつきてしまい、その後はほとんど勉強が手につかないような状況でした。そのような状況でしたが、あえて述べさせていただけば、一応各法科大学院の過去問には目を通して、一年から二年分時間を図って問題を解くということをしました。特に慶應義塾大学法科大学院では非常に解答時間が短く、事前に時間対策をしていた人とそうでない人とで大きく差が出てしまうと思います。本番後も答案用紙回収中に回収されていく答案を見ていると、中にはほとんど白紙という人もいて、時間対策で相当の差が出るということを実感しました。私は、国立は一橋大学法科大学院を受験したのですが、一橋では毎年非常に難しい問題が出題される科目があります。今年も正直これはちょっと...、という難しい問題が出題されました。そういった難しい問題ですが、本番で実際に解けている人はほとんどいないと思います。さすがに白紙で提出しては合格できないと思いますが、一応何か考えました、という答案さえ提出しておけば周りと比べて不利になるということはないと思います。本当によく言われることですが、重要なことは、そういう問題が出たときに気落ちせずに、いかにほかの基本的な問題を落とさないかだと思います。各法科大学院の法律試験に向けた対策として重要なのは、やはり何よりも基本的な部分を理解・暗記するというところに尽きると思います。ほとんどの問題は基本的な部分や教科書によく出てくる事例などが直接聞かれますし、難易度が高いと思うような問題でも、とりあえず基本だけ書いてくれば十分に合格答

案になると思います。自分でも失敗したなぁというような問題も何問もありましたし、何を聞いているのかすらわからないという問題もありましたが、いずれの大学院にも合格できましたので、やはりとにかく基本を怠らないというのが重要だと思います。また、基本書を使うのか予備校本を使うのかで迷われている方もいらっしゃるかと思いますが、どちらにしても一長一短ですので、自分で見て見やすいものを選ぶのが一番だと思います。重要なのは使う教材の短所を書き込みや演習書で補えるか否かだと思います。